

# 障がい者支援と ソーシャルインクルージョン

## 番外編



K. Zayeghi/ICRC

### 目次

障がい者の尊厳を支える	1-2
理学療法士として働く日本人職員	3
リハビリ事業の立役者 アルベルト・カイロ	4-5
ICRC の支援を受けて ～障がい者の声～	6-7
絵画コンテスト in アフガニスタン	8
「MoveAbility 基金」	9
写真でみるバラスポーツ	10-11
東京パラリンピックに向けて	12

ICRC が身体リハビリテーション事業を立ち上げたのは 1979 年。現在では、48 カ国の計 165 カ所以上の施設でリハビリ事業を展開しています。

地雷や爆撃など紛争によって直接被害を受けた人たちだけでなく、昨今ではこれまでの知識や実績を生かして、医療システムの崩壊により、適切な治療や予防、ワクチン接種を受けられずに障がいを負った紛争地以外の人たちも、国や関連団体と連携してサポートしています。

### 障がい者の定義は？

世界保健機関（WHO）が指定する国際生活機能分類（International Classification of Functioning, Disability and Health）によると、障がい者とは機能障害、活動の制約、社会参加への制約がある人を指し、世界人口の約 15% にあたる 10 億人以上が該当します。なかでも、身体を自由に動かすことができない 15 歳以上の成人は多く見積もって 1 億 9000 万人とされています。

高齢化が進み、糖尿病などの慢性疾患の患者が増加したことに伴い、障がい者の人口は年々右肩上がりの傾向にあります。医療サービスへのアクセスが困難な場合も多く、総体的にみて障がい者が必要な支援を受けられていないことが報告されています。

### ICRC のアプローチ

身体の可動範囲を広げることは、障がい者たちの自活を促し、教育、仕事、収入を得るための第一歩です。リハビリ事業では義手や義足に加えて、

## 障がい者の尊厳を支える

赤十字国際委員会（ICRC）は、中立・独立・公平の原則の下、紛争やその他の暴力で犠牲を強いられている人々の生命と尊厳を保護することを人道的使命としています。人間としての尊厳を保ちながら人生を満喫してもらうこと、そして障がい者を受け入れる社会づくりに貢献することも同時に進めなければなりません。

「戦時の決まりごと」である国際人道法に基づき、戦闘に参加していない民間人をはじめ、傷病兵や捕虜など実際に武器を持って戦えなくなった人々は私たち ICRC の支援・保護の対象となります。障がい者もこれにもれず、加えて、身体能力向上のためのリハビリテーションや、ソーシャル・インクルージョンを目指した支援なども提供されます。

運動能力を高める装具や歩行を補助する杖、車いすなどの補装具も提供します。

自由に動けるようになったら、今度は社会復帰が待っています。補装具を使いこなすための訓練やセラピーのほかに、少額融資をして起業を手助けするなど、経済的、社会的に自活できるようサポートします。障がい者の社会参画、ソーシャル・インクルージョンを可能にするためには継続的・包括的な支援が必要であることから、紛争が終わりICRCが去った後も事業が展開されていくよう、人材開発や設備投資など、その国のインフラを築くことにも重点を置いています。たとえば政府による障がい者支援の能力強化、サービス事業提供者への支援、地域における専門的な障がい者支援ネットワークの構築などです。

## 持続可能な支援に向けて

### 人材の育成

リハビリ事業を長く根付かせるには、訓練を受けた

専門家の存在が必要です。1979年以来、ICRCは十数カ国で義肢装具の学位プログラムを提供したり、国際義肢装具協会から認定された義肢装具士向けの訓練プログラムを開発したりしています。また、義肢装具や理学療法について学びたい人には、資格を得るために、認定校での訓練が受けられるよう奨学金の提供も行っています。

### 新しい技術の導入

近年、科学技術の進歩によって成形材料の開発が進み、より安価で高品質のものが手に入るようになりました。限られた予算の中で質の高いリハビリ事業を維持していくために、市場の調査や開拓、産学連携にも積極的に乗り出しています。

その一例がポリプロピレン樹脂の導入です。事業を立ち上げて間もない頃、ICRCは義手・義肢の部品を生産するのに定評のある欧米の供給者から原材料や機械を調達していました。やがて、持続可能な事業にするために、低価格で品質が良く、再利

用が可能なポリプロピレン樹脂で義肢装具を開発をすることになりました。試行錯誤を繰り返した結果、現在では大量生産にこぎつけています。

### 新たな資金調達の仕組み

残念ながら、ICRCの活動費は年々増加の一途を辿っています。それは、紛争の長期化や都市化によって、犠牲を強いられ、支援を必要としている人々が増えていることにほかなりません。同じことがリハビリ事業についても言えます。

こうした状況を背景に、2017年、「ヒューマンタリオン・インパクト・インベストメント (Humanitarian Impact Investment : HII)」を設立し、債券を発行して人道支援につなげる仕組みを打ち立てました。ICRCの活動に民間企業が投資し、現場での成果に応じてリターンを得る、というものです。

まずHIIで目指したのは、ナイジェリア、マリ、コンゴ民主共和国のアフリカ3カ国にリハビリセンターを建設し、5年間運営するための2,600万スイスフ

ラン(約30億円)の資金調達でした。

民間企業からの投資を元手に、ICRCはリハビリ事業を行います。新しいイニシアチブの導入、モニタリング、改善を繰り返し、事業の効率化を図ります。独立した監査法人が成果を精査し、前年よりも効果が向上していれば成功と見なして、後援者であるイギリス、ベルギー、スイスなどの政府から報酬が投資者に支払われる仕組みです。

HIIを通じて、2020年1月にはマリ中部のモプチ州に新たな義肢義足センターを開設予定で、ICRCは建設と設備投資、人材育成を同時に進めます。

# ICRCのリハビリ事業

リハビリ事業の目的は大きく4つ

- 1) 宗教や民族、社会的立場に関係なく、障がい者が必要とする支援を提供すること
- 2) 理学療法や補装具は時代に即したものであること
- 3) 事業の継続性を確保すること
- 4) ソーシャル・インクルージョンと社会参画を多角的に支援・促進すること

## 2017年の活動実績



7,201人

車いすや(障がい者用)三輪車を提供



46,301人

歩行補助具を提供



12,742人

義肢を提供した新規患者



54,382人

矯正などの目的で新しい装具を提供

※「義肢」「装具」の定義は、公益社団法人日本義肢装具士協会を参照  
<https://www.japo.jp/about-prosthetist/prosthetic-brace.html>

## 理学療法士として働く日本人職員 向山翼さん



2017年8月からICRCで理学療法士として活動する向山さん。2018年1月末からは、イラク中南部にあるICRCナジャフ副代表部に所属し、ナジャフ、ケルバラ、バスラ、ナシリアの4カ所にある政府運営のリハビリセンターを支援しています。義肢製作に必要な材料の提供から技術協力、また運営に関するアドバイスなども行っています。

基本的には一つのセンターに1カ月ほど滞在し、次のセンターに移動。そこにまた1カ月滞在するという勤務状況。「本当に困っている障がいのある人たちへ、どうやって支援の手を差し伸べるかが、実は大きな課題です」と語ります。

ナジャフのリハビリセンターでは、脳性まひをもつ子どもとその家族を対象とした教育プログ

ラムを実施しています。障がいがあっても関わり方次第で子どもの本来持っている能力を引き出せることや、日々の活動のレベルを向上させていくことができるということを家族に説明し、指導することが目的です。

最も大事なポイントは、「患者家族同士の情報交換を促すこと」と向山さんは話します。障がい者が社会に受け入れられているとは言えない環境下では、障がいのある子どもは家で家族とのみ過ごしがちになり、結果として一家が孤軍奮闘していることが多いとのこと。そうした家族が教育プログラムを通じて社会とつながり、情報共有することで同じような経験を持つ家族と知り合い、外に出ていくきっかけになれば、と語る向山さん。今日も現場で障がい者やその家族に寄り添っています。



T. Gassmann/ICRC

TED トークでアフガニスタンでの経験を語るカイロ

## アルベルト・カイロ — ICRC のリハビリ事業、伝説の男

アルベルト・カイロはイタリア出身の理学療法士で、1992年からアフガニスタンにあるICRCのリハビリ事業を統括しています。それから約四半世紀、彼はアフガニスタンを離れることなく、現在も障がい者が尊厳を持った生活を送れるよう現場で支え続けています。2010年には、ノーベル平和賞受賞候補のファイナリストに残った、伝説の職員です。

カイロは2011年、世界の様々な分野で影響力を発揮している人々がプレゼンテーションを披露する「TED」トークに登壇。アフガニスタンで出会った人々とそこから繰り広げられるエピソードを語っています。彼のTEDトーク公式動画は、これまでに約87万回以上再生されています。

### TED トークの概要

カイロがアフガニスタンに赴任した当時は、戦傷によって足を切断した人のための義足をつくるほか、戦傷者以外の患者も診ていました。しかし、戦闘が悪化するとセンターが閉鎖されたため、食料配付の業務に就きました。

ある日、帰宅途中で爆弾事件が発生。逃げる途中、車いすに乗った親子をみかけます。片足、片腕がない男性マフムードが乗った車いすを、必死に押す小さな息子。「義足は？」と尋ねると「赤十字が閉鎖されたので」という回答が返ってきます。気付いたらカイロは「明日、ICRCのリハビリセンターにおいで」と誘っていました。

翌朝、閉鎖中のセンターの前には、人だかりがありました。門番は、センターの再開を待ち望む人が毎日行列を作っていると言います。

そこにはもちろん、マフムード親子も来ていました。以降、カイロは彼らたちとの交流を通して、

どんな状況下でもセンターを常に開ける決断を下します。

義足で走ることも可能になったマフムード。再びカイロの下へやってきて、あるお願いをします。その時マフムードが自らを「クズ」と呼んでいることに衝撃を受けたカイロは、障がい者の尊厳を回復すべく、あることを試します、

### TED トークの内容はこちら

英語版「There are no scraps of men」

[https://www.ted.com/talks/alberto\\_cairo\\_there\\_are\\_no\\_scraps\\_of\\_men](https://www.ted.com/talks/alberto_cairo_there_are_no_scraps_of_men)

日本語字幕版「人にはクズなどいない」

[https://www.ted.com/talks/alberto\\_cairo\\_there\\_are\\_no\\_scraps\\_of\\_men?language=ja](https://www.ted.com/talks/alberto_cairo_there_are_no_scraps_of_men?language=ja)

カイロは、TED トークの動画が「障がい者への尊厳に目を向ける、些細なきっかけになってくれれば」という思いで引き受けたと言います。しかし、予想を超える反響に、本人もびっくり。2016年にはNHKのEテレでも複数回放送され、新聞の投書欄にも視聴者からのコメントが掲載されました。

<http://www.nhk.or.jp/superpresentation/pastprogram/161006.html>

その一方でカイロは、自身が思い描く理想である「障がい者のソーシャル・インクルージョン」には、今の私たちの社会は程遠いと話します。

「私はクズだ。でも、あなたが助けてくれるのであれば、なんでもやる。」心に刻まれたこの言葉は、今でもカイロを奮い立てています。

### カイロの言葉：

TED トークでも触れましたが、私たちを含め、多くの方がリハビリを医療分野における優先事項だとは考えていませんでした。もちろん重要性は認識していましたが、最優先ではありませんでした。しかし、支援を受けた人たちは、私に教えてくれました。歩けるようになること、自立すること、尊厳のある生活を送ることの間には密接な関係があることを。だからこそ、リハビリを要望する声に応えることにも緊急性が伴うとの認識を持たなければならないのです。

これまで、障がい者には、戦闘が始まれば治療は待たなければならないと、伝えてきました。しかし、彼らは生活を再建し、自信と自尊心を取り戻そうと必死でした。

戦時下であっても、人々は与えられた人生を満喫する権利があります。もちろん暴力のせいで、何かしらの活動を停止せざるを得ない瞬間もあるでしょう。でも、治安回復とともに、支援はすぐに再開されなければなりません。

アフガニスタンでは紛争が何十年も続いています。これ以上、待ち続けることはできません。

### 障がい者自身の経験が事業を支える

ICRCはアフガニスタンで7つのリハビリセンターを運営しています。センターで働く人の90%以上は、障がい者です。業務内容は簡単な作業にとどまらず、患者の管理から意思決定に携わる業務までと多岐にわたります。また、彼らが持つ経験や地元地域に関する知識は、事業向上において重要な役割を果たしています。

### 一番大切なのは、障がい者が自尊心を取り戻すこと

リハビリセンターを訪れる人たちは、年々増えています。カイロが強調するのは、精神的なダメージを取り除くこと。「自分はもはや完璧な人間ではない」「美しくない」と障がいを負った人たちは考えがちになります。

パラスポーツを取り入れてから、大きな変化があったとカイロ。最初はただスポーツを楽しむだけだったのが、身体能力や筋肉が強化され、患者たちは次第に自分の肉体に誇りを持つようになります。やがて、それが自信、自尊心に。それこそが、「人間のあるべき姿だ」とカイロは語ります。



S. Contiani/ICRC

2015年、カイロは車いすバスケットチームと一緒に来日。動画はこちら [ICRC 戦禍から世界の舞台へ](#)

## ICRC の支援を受けて ～障がい者の声～

サッカーは単なるゲームじゃない  
人生を一気に変えるゲームチェンジャーだ

—アフガニスタンのラミーシュ・ニクザイさん (21 歳)



地雷を踏んだのは9歳の時。友だちと凧あげをして走り回っていたんだ。

僕の人生はお先真っ暗になった。

でも、サッカーがその人生をさらに変えてくれたんだ。

ICRC のリハビリセンターに通い始めた頃は絶望していて、健常者と同じようになれるなんて夢にも思っていなかった。でもサッカーに出会って何もかもが変わったんだ。また幸せを感じる事ができた。社会の一部にもなれた。今は未来も明るく感じるよ。



ヒツジは私にとっての財産。

### シリア：モハマドさん

7年以上も紛争に苦しめられているシリア。人々の生活は言葉にならないほど様変わりしてしまいました。

首都ダマスカス近郊の町に住むモハマドさんは、19歳の時に片足を失いました。でも希望は失っていません。ICRC のリハビリを受け、提供された5頭のヒツジで生計を立てています。



最初は床を這って、手で身体を動かしていた。自分の足で歩くことなんてできなかった。水を飲むにも、ご飯を食べるにも、何をするにも他人に頼らざるをえなかったんだ。

でも、本気で取り組みればできないことなんてないんです。リハビリを受ければ自信と希望が取り戻せる。誰だって希望を持つことができるんです。

### ミャンマー：サイ・カイさん

ミャンマー北東部シャン州モン・ビンに住むサイ・カイさん (中央)。

サイさんは、友人の結婚式からバイクで帰宅する途中、事故に遭いました。そのまま意識を失い、翌朝目が覚めると両足を動かすことができませんでした。這ったまま近くの店のオーナーに助けを求め、なんとか自宅までたどり着きました。彼の家の近くに病院はなく、地元の人が薬草を使って治療してくれました。身体を自由に動かせない自分の将来と、老いていく母親を心配する日々でした。

ある日、ICRC のリハビリ施設が車で数時間のと

ころにあるらしい、と親せきが教えてくれました。サイさんは周囲に促されるままりハビリセンターへ向かいました。

そこで彼は毎日3時間リハビリに励み、夜はセンターの近くで僧侶と時間を過ごしたりしていました。3カ月後、サイさんは松葉杖なしで300m 歩けるようになっていました。

彼の夢は、小さな農場を自分で経営して家族を養うことです。「努力すればなんでもできるということを証明したい」と今でも歩行訓練を欠かしません。



## 絵画コンテスト in アフガニスタン

ICRCがアフガニスタンの障がい者の生活を向上させるために同国でリハビリ事業を始めて、2018年で30年が経ちました。30周年を記念して、北西部の都市ヘラートのリハビリセンターに18人の若手アーティストを招待し、絵画コンテストを10月に開催。患者が生きる力を得ていく様子を間近に見たアーティストたちの作品は、ICRCアフガニスタン代表部のFacebookで紹介されました。

このコンテストがユニークなのは、審査員にFacebookユーザーが含まれていたことです。ヘラート大学の美術教員やICRC職員による審査に加えて、Facebook上での「いいね！」の獲得数もカウントされました。

一番多くの「いいね！」を獲得して優勝したのは、赤十字と赤新月のマークを背景に義足で立つ男性を描いた、サイド・ナシル・ナスタフさんの作品。続いて、リハビリセンターの外を歩き交う医療スタッフと患者を描いた作品が2位、3位は口に筆を加えて絵を描く女性の作品でした。優勝したナスタフさんは、「初めて参加したこのようなコンテストで賞をいただいて、とても嬉しいです」と喜びを語りました。

優秀作品に選ばれた上記3作品は、そのレプリカがヘラートにあるICRCリハビリセンターの壁に展示されます。



1位  
サイド・ナシル・ナスタフさんの作品



2位  
ジャリル・アーマッドさんの作品



3位  
ラティファ・ハミディさんの作品

## 障がい者支援の新たな枠組み 「MoveAbility 基金」

ICRCの支援は、紛争もしくはその他の暴力で犠牲を強いられている人々を対象に行います。しかし、紛争下でない国においても、必要な支援を受けられない環境に置かれている人々も数多くいます。

WHOによれば、障がい者が必要とする支援が満たされていないケースが、低・中所得国において深刻な状況にあるといます。そうした国において障がい者を支援し、ソーシャル・インクルージョンを促すために、通常のプログラムとは別に「ICRC障がい者のための特別基金 (ICRC Special Fund for the Disabled)」を1983年に設立しました。その後、2017年1月に、「ICRCムーバビリティ (MoveAbility) 基金」と名称を変更。「Move」は動く、「Ability」は能力を意味します。身体を動かす力を強化するという組織の目的を強調したこの基金の運営費は、主に各国政府や財団、各国赤十字・赤新月社、そして企業、個人の寄付によって賄われています。

同基金による事業は、支援を必要とする国の政府当局から要請を受け、内部審査を経て決定されます。政府に代わってサービスを提供するのではなく、低・中所得国で障がい者が直面する障壁を取り除くこと、そして質が高く、持続可能なリハビリサービスへのアクセスを維持・向上させ、障がい者支援とソーシャル・インクルージョンがその国に根付くことに主眼を置いています。

2017年は次の14カ国で活動を行いました：

マダガスカル、タンザニア、トーゴ、ベトナム、タジキスタン、エルサルバドル、ニカラグア、ベニン、コートジボワール、ルワンダ、ソマリア、ザンビア、ハイチ、エクアドル



スポーツ用義足を作ってもらい、その感触を確かめるムッサ君



### 諦めかけていた夢を取り戻した タンザニアの少年

タンザニア出身のアブドゥル・ハマド・キパン君 (11歳) とムッサ・フセイン君 (9歳) の二人は、交通事故で下肢を失いました。ただ、タンザニアでは、障がい者用の人工装具やリハビリサービスが提供されるのはごく一部。2人はアフリカ南部の障がいのある子どもたちを支援するプログラム「ジャンピング・キッズ (Jumping Kids)」に参加する機会を得てスポーツ用の義足

を作ってもらい、訓練を受けることができました。このプログラムは南アフリカにある義肢製作所3社が立ち上げムーバビリティ基金も参画しています。2人の少年とともに、タンザニア出身の義肢装具士2名も参加。帰国後に少年たちを技術面でサポートしていただけるよう、人工装具やリハビリにおける最新の知識を習得しました。そのうちの一人、ルース・オネスモさんは「スポーツに触れることが、切断手術を受けた子どもにとっていかに効果的であるかを目の当たりにしました。自分に合った義足を装着し、正しくリハビリを受ければ、障がいがあっても他の人と同じように成長できると感じました」と話します。

アスリートになることが夢だったムッサ君。交通事故に遭ったことで一旦諦めたものの、義足を得ることでさらなる野望を抱き始めました。それは、タンザニアを代表するパラリンピック選手になること。「少しも時間を無駄にしたいくないんだ」と、ムッサ君は義足を装着するやいなや駆け出しました。

# 写真でみるパラスポーツ

障がい者競技にはどんな種目があるかご存じですか？東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会によれば、2020年の東京パラリンピック競技大会では22種目の競技が実施されます。

ICRCのリハビリ事業を通じて自立を目指す障がい者の中には、パラリンピック選手を夢見て日々鍛錬を重ねている人たちがたくさんいます。障がいを背負うことになった背景や、選手の置かれている状況は国によって異なりますが、必死に夢を追いかけて努力する姿は、私たちに勇気と希望を与え、能力の無限の可能性を示唆してくれます。



C. Lumingu/ICRC



S. Cherkaoui/ICRC



V. D. Viguier/ICRC



P. Krzysiek/ICRC

コンゴ民主共和国 / キンゾンジ・カバ・ポールさん(左)とムウェンガニ・マボンゼ・ジョーンさん。車いす競技に出る選手は、自分たちで車いすを調達しなければならない。二人は、ICRCが寄付した車いすで練習に励む

ギニア・ビサウ / 同国代表の男子車いすバスケットボール選手ティエノ・ロベスさん(写真中央)は、子どもの頃に両脚がまひして以来、偏見と孤独と闘ってきた。パラスポーツを通じて、今、再び社会の一員になったと感じている

ボスニア・ヘルツェゴビナ / シットイングバレーボールは、地雷犠牲者の社会復帰に役立っているだけでなく、紛争に関わった退役軍人が一緒になってプレーすることで、和解の場にもなっている

イラク / キルクークにあるリハビリセンター。交通事故で両足を失った元建設作業員のアーメッドさん(24歳)は、現在の重量挙げのイラク代表選手



P. Krzysiek/ICRC



C. Diarra/ICRC



ICRC



C. Lumingu/ICRC

イラク / 国内選手権に先立って行われたフェンシングの親善試合後に、カメラに向かってポーズをとるマリアムさん(写真左)とシェイナさん

ミャンマー / 首都ネピドーで行われたASEANパラゲームの陸上女子100m決勝。ICRCの支援により2003年に設立されたパアン・リハビリセンターが製作した義足で、2人の選手(共にオレンジのユニフォームを着用)が決勝にのぞんだ

ミャンマー / 2014年のASEANパラゲームにミャンマー代表として出場したアウン・ギイ選手は、砲丸投げで金メダルを獲得。ICRCは、ミャンマーに3つあるリハビリセンターを技術・財政の両面で支援している

コンゴ民主共和国 / 同国のパラリンピック組織委員会とICRCからの支援を受けて、首都キンシャシャでやり投げの練習をするルイナ・ロゼッタ選手。彼女は2010年に地雷を踏み、足を切断。2014年にブラジルで開催されたリオ・パラリンピックで初の大舞台に挑んだ



## 東京パラリンピックに向けて

### 障がいだけでなく、環境とも戦うチーム

障がい者の身体能力向上に加えて、ソーシャル・インクルージョンも後押しする ICRC は、数々のバラスポーツを支援し、選手やチームが国際的に活躍できるよう陰から支えています。ここで紹介するのは、2020 東京パラリンピックを目指すカンボジアの女子車いすバスケットボールチーム。首都プノンペンから北西に 300km 離れたところにあるバットンバンを本拠地とし、22 歳から 35 歳までの 22 人の選手が所属。みな ICRC のリハビリを受けています。

学生や社会人もいれば、子育てをする母親もいて、障がいを背負うことになった経緯も、地雷被害、脳性まひ、ワクチン不足によるポリオ感染などさまざま。ICRC のリハビリ事業により可動範囲が広がった彼女たちをより前向きにさせているのは、バスケットボールと仕事です。

選手の一人、ンゴー・シュレブさんは、ICRC から少額融資を受けて家計を支えることができるようになった一人です。この少額融資イニシアチブには、プノンペンを本拠地とする日本企業の「ウエダコーヒー」も参画。同社は移動式コーヒー店の先駆けで、ICRC が支援する障がい者とフランチャイズ契約を結んで起業を後押ししています。スクーターやコーヒー豆の購入といった初期費用を ICRC が負担し、ウエダコーヒーがスクーターの改造や人材育成のための研修を行っています。

シュレブさんは、2015 年から移動式コーヒー店を経営。「準備のために毎朝 4 時に起きることもへっちゃら。また仕事できるなんて幸せ」と話します。

バスケットボールも、彼女たちの「自信」の一翼を担っています。2018 年 10 月にインドネシアで開催されたアジアパラ競技大会に出場するなど、今では国を背負って立つ存在に。結果は、6 チーム中 6 位と最下位でしたが、現在は東京パラリンピックを目指して、日々練習を積み重ねています。



ICRC とウエダコーヒーのコラボレーションを紹介した動画はこちら [ICRC カンボジア 自由自在](#)

ところが、東京への夢を叶えるには、自分たちだけでは解決できない大きな課題をクリアしなければなりません。実はこのチーム、屋内練習場がないのです。年間を通して気温が高く、雨季も長いので、吹きさらしの環境では十分に練習できません。雨をしのぐための屋根を備えつけるだけでも、日本円で 850 万円以上かかります。建設費の調達に、ICRC も頭を悩ませています。

### 夢を追いかける選手たちを応援

いよいよ東京パラリンピックを来年に控え、ICRC は障がいを克服したアスリートたちに光が当たり、たくさんの熱い声援が送られるよう願っています。

私たちは大会の開催期間中、スイス大使館が設置する「スイスの家 (House of Switzerland)」において写真展やトークショーなどを行う予定です。

そのほかにも、ICRC が支援する選手の招へいなど、さまざまなイベントを企画しています。詳細が決まり次第、駐日代表部のウェブサイトやフェイスブックなどでお知らせします。

赤十字国際委員会 駐日代表部  
〒107-0052 東京都港区赤坂 1-11-36  
レジデンスバイカウテス #320

Tel: 03-6628-5450

Email: tok\_tokyo@icrc.org jp.icrc.org

表紙の写真: イスラエルのパレスチナ自治区ガザに住むオサマさん。両足を失ってから苦しい時期を過ごしていたが、あえて自分の肉体に挑戦しようとスポーツを始めて人生が変わったと話す

facebook.com/ICRC.jp

twitter.com/ICRC\_jp



ICRC